



『避病院』と里山



今年のNHK朝ドラ『風、薫る』は、文明開化が進む明治時代、当時はまだ確立されていなかった「看護」の世界へ飛び込み、プロの看護師（トレインドナース）として成長して行く女性を描いています。ドラマの初頭、コロリ（コレラ）の大流行が描かれます。まだ治療薬がなく、死亡率7割の感染症です。感染者の出した家には張り紙が貼られ、患者は村はずれの「避病院」（ひびょういん：伝染病院の通称）に運ばれ隔離（かくり）されます。主人公の父親もこの病で亡くなります。

コレラは、1876（明治9）年、寄港したアメリカ海軍の船内から広まり、国内で爆発的な流行となりました。その後、各地で避病院の設置が進められました。1897（明治30）年には、『伝染病予防法』が制定され、市町村には伝染病院または隔離病舎設立が義務付けられました。

熊谷の町には、熊中・熊農の北に、伝染病院・火葬場・大原霊園がありました。昭和の合併前の江南5か村では、市田村は手島、吉見村は？、御正村は今の江南病院通り、小原村は今の循環器センター辺りに避病院がありました。

さて、吉岡村は…？ 小さい頃、「原（はら：中学校周辺の台地）には、避病院があった。」という話を聞いたことがありました。たぶん、その地が里山活動のフィールドの原点だろうと予想していました。

図書館で、1940（昭和15）年版『熊谷』の地形図（決頁）を見つけました。そこには、今の駐在所周辺に避病院の地図記号がありました。これで、里山活動との関係が繋がります。それは、吉岡村立の避病院→廃院→村有地残る→昭和の大合併→市有地となる→荒れた竹林→熊谷市職員自主研究グループが、市有地で、竹の伐採と竹炭作り等の『里山保全活動』を試験的に始める→地元企業・PTA・自治会等が協力→市有地周辺の私有地も地主さんの協力を得て、『吉岡里山グランドワーク』として継続、今に至る。予想通りの展開です。

コロナ禍を経験した私たちは、パンデミック（感染症の大流行）が社会や個人に与える不幸な状況を目撃しました。新緑の緑爽やかなこの林に、かつてあった無念や絶望の人間ドラマに思いを馳せます。

今年度最初の活動は、6月14日（日）に行われました。初夏を思わせる晴天の下、40名近くの人々が集い、鎌や刈り払い機で里山や遊歩道の下草刈りに精を出しました。お疲れ様でした。

里山には、野口会長や中島事務局長のご尽力により、新しい立て看板が設置されました。ありがとうございます。



次回里山活動予定
7月12日（日）9:00～里山整備

カラー版は、ネットでご覧いただけます。「吉岡里山」で検索してみてください。